

ピア・レスポンス導入後の期末レポートにみられる 論述構成上の課題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中尾, 桂子 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6091

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ピア・レスポンス導入後の期末レポートに みられる論述構成上の課題

中 尾 桂 子

大妻女子大学短期大学部
E-mail: nakao@otsuma.ac.jp

概 要

国文学論文とBCCWJの新聞、教科書語彙との比較と考察を通し、国文学の論述文の構造を担う動詞として特定した『分類語彙表』の「2.30心」類と「2.31言語」類の動詞16語の出現数を、論述の章節構造内の分布として観察した。結果、国文学論文の論述動詞の出現数には共通するパターンが認められたが、学生の期末レポートの出現分布には出現数にはむらがあり、論述構成が不完全なことを示唆する結果が得られた。以上から、特定の動詞の出現パターンから論述構造が示せる可能性、ならびに、論文構成と述語動詞を関連させた指導の必要性が示唆された。

キーワード

国文学、論述構成、述語動詞、出現位置、対応関係、コレスポンド分析

1. はじめに

初年次の必修科目で、文章の書き方、論文やレポートの書き方を指導する大学が増えている。大妻女子大学短期大学部国文科でも、ここ数年は初年次必修科目として、半期で、論文、レポートの書き方を指導してきた。授業の目標は、書式上の約束事を手がかりに、書式の意味を理解し、論述文とはどのようなものかを学習してもらうことであるが、論述の形式という決まりの意義自体を理解してもらうことが難しく、例年、学期末のレポートは、学習した内容が十分反映されているものとは言えなかった。

たとえば、2011年度の成績下位群に含まれる一例を見ると、章立てが「序論」「本論」「結論」「考察」というタイトルの4章からなる。章内の段落数は、それぞれ、1段、2段、1段、1段で、段落内の文数が、それぞれ、6文、9文、5文、2文である。最小文字数の1文が23字（1文中）で、最大文字数の1文が118字（1文中）である。また、1章が1段落だけの場合もある。一応、1文の平均文字数は約42字であるが、そのほとんどは20字程度の文であり、それらの中に若干混じる80字超えの2～3文によって平均文字数が42字となっている。つまり、成績下位群の学生の文章には、20字程の短文の中に、少量の80字を超える長文が入っているということである。文章のごく形式的な文字数の状況からでも、そのたどたどしさが伺える。

一方、学術論文の平均数を正確に示すことはできないが、本学紀要の文学の論文を一例にすると、章の内容を表すタイトルをつけた章が4つあり、1章あたりの段落数が10段落、1段落あたりの文が5文から8文、1文が平均50文字程度である。この学術論文例と成績下位群の学生のレポートを、その章のタイトルと合わせて見れば、学生の文章が形式上のつじつまのみを合わせた少数の記述量であると言える。

しかし、この期末レポートを書いた学生も、授業中の課題では文章の記述量が多く、意見文も論理的に表現することができていた。ということは、わざと手を抜いたということではなければ、この学生の授業の理解が、論文、レポートの形式的な約束事のごく表面的な理解でとどまっていたということになる。このように、授業では問題が見られないのに、学期末になってはじめてその理解の程度が判明するという学生が、毎年一定数存在する。つまり、これは、文章の表現と論文構成の関係が有機的に理解されていないということであり、そして、これは、授業が、目標の「論文」というものの意義、イメージが十分に意識されるようなコースデザインになっていないことに一因があるのだろう。

2 そこで、2012年度の指導では、限られた期間で、約束事とその意義を自分なりに考えて意識化してもらえるように、教師主導型の実習指導から学習者主体の実習指導へと指導方法を変えてみた。学生が主体的にその是非を討論する協働学習の場を導入したクラスでは、期末レポートのテーマや章立てのタイトル

が具体的なものになった。さらに、協働学習の作業にループリックによる相互評価を導入したクラスでは、教師の印象でしかないが、期末レポートの記述量が増え、ともに、文や段落、章の数が増えて各タイトルの具体性が高まっていた。また、2012年度はいずれのクラスでも、期末の授業アンケートで好評価をつける学生数の増加が確認できた。

しかしながら、文や段落、章の数が増えて各タイトルの具体性が高まったところで、論文らしい文章になっているかということ、そうでもなさそうである。文章の結束性に影響があると考えられる指示詞、接続詞、接続助辞、文末形式を指標に、論文と期末レポートを概略的に比較したところ、似たところはあるものの、論文とは依然、結束性のために利用される語句の使用状況に差があった（中尾 2012）。文どうしの論理関係や、論述展開を支える表現が少ない文章は、文どうしの関係が見えにくく、論述的ではないと言える。協働学習により、「考え」たとしても、文章に、その「考え」が反映されておらず、論述的な文章にはなっていないようである。

ということは、学習活動における意識化という授業運営の問題ではなく、学習題材の具体性に問題があるということではないか。文章には、一文単位に備わる表現を利用して形成する文章の型とでもいうような構成があるが、その構成を形成していくために適切な表現を利用する必要があるということこそを学生が理解していなければ、文章の論述的性格が明確にはならないだろう。そのためには、具体的に、どのような語句にどのような働きがあり、その使用により、文章の構成がどのように形成されるのかを明確に示すとよいのではないか。

このような指導を考えるためには、資料として、目標となる論述文の構造、ならびに、学生の陥りやすい文章上の問題を具体的に観察した結果を利用したい。しかし、形式的な統語構造における「文型」としての指導案等は見られても、意図も加味して構造と表現の対応関係が現学生の状況に合うようモデル化され、そのための語句を具体的に示したものは見当たらない。初年次教育のための指導資料を得るには、論文と模倣との間にどの程度の差があり、それがどのようなところに現れるかという観察を積み上げていくことから始める必要があるということだろう。

2. 先行研究

2.1. 論文構成と論述表現に関する研究の動向

日本語教育では、従来、作文指導の観点から、目的の「らしさ」が何に準拠するのか探求されてきた。しかし、これらは、論文指導というよりは正確なネイティブ相当の日本語を書くという統語知識の正確な配列を確認することが中心課題である。この他は、感想文等の作文、意見文、要約文という括りで学部留学のための準備に関係する研究が多く、村田（2007）が接続表現を指標に文章のジャンル差を明らかにして論文指導含めた作文指導の観点を提示しているように、論文の全体構成に着目して具体的な指導項目を明らかにしようとする研究は多くない。

文章構成に着目した研究を行うことの多い談話分析では、英語との比較において日本語の談話ディスコースを分析するものや、日本語独自の意見論述の文脈について、新聞の相談コラムや会話での文脈構成を分析する研究があるものの（Kobayashi 1984, メイナード 2004, 荻原 2009）、論文の文脈をその必須の表現と具体的に結びつけて分析するものは管見の限り見当たらない。

もちろん、文章論という、永野（1986）や、市川（1978）などに端を発する研究が古くからあり、これらの中に、「論理を展開し、主張を説きあかす文章」（市川 1978: 37）としての論説的文章についての研究がある。しかし、その流れでの研究は、構成全体というよりは、各文の連なり方の型（長田（1984）の連文の型や、林（1974）の文学や初等教育のための文章構造の型など）として内容上の構成を見ていく流れや、石黒圭（2009）など、主に接続詞の機能に着目して分析されるものにつながっており、論理展開の結果として構成されている「論文」全体の構成を特に言語形式との関連で分析するものは見られない。

4 先行研究として、論文の表現、ないしは、論文の構成を、初年次教育の範疇で取り扱えるように一般化しようと分析する研究が少ないのは、一つに、文章論の研究方法のうち、内容を一般化して、異なるスタンスや分野の論文構成をモデル化するような樺島（1964）や水谷（1983）の語彙論等の計量的な研究が

発展しなかったということがあげられるだろう。

その背景には、日本における論文指導の評価観点が主に規範という理想に立つことに対して、問題意識を持つことがなかったのが関係しているのではないか。昨今の初年次教育やリメディアル教育の観点から論文指導が文章指導の目標として焦点になる機会が多くなってきたものの、その指導内容である論文自体を分析し、一般化しようというような意識は高くない。これには、初年次教育が基礎知識だという意識が高いこと、規範意識による理想の「お約束」を基礎としておきたいというような教師側の意識などが関係しているのか。

ともあれ、中尾（2012）は、学生の言語運用能力が低下しているにもかかわらず、多様な背景を持つ教師がそれぞれの規範意識のみで論文やレポートを評価することに疑問を持ち、論文を一つの談話ジャンルと捉えて、論文指導に利用するための明確なルーブリックを作成する必要性を主張している。中尾（2013）でも、国文学の論文と国文学科の学生の期末レポートの差をコレスポネンズ分析やクラスタ分析で概略的に比較、分析した結果から、分野別の一般化の必要性を主張している。しかし、中尾（2012）と中尾（2013）の主張は、論文と学生レポートとの共通性の有無とその距離（性質の差）から、「似た部分があるが違う」と判断するのみである。語句の頻度をベースに、論文とレポートを、グループ間で比較しただけでは、論文の文章構成を担う要素となる表現を特定するには情報が十分ではない。

分析対象の種類を、指導の前後の差をも加味しながらも、論文との相関を考慮して検討し直すこと、また、詳細な状況を見やすくする情報化、すなわち、分析の対象と方法、二つの観点を詳細に検討していくべきである。

「論文」を目標に、その書き方を指導する授業を行う以上、達成度を判断するための具体的な指針がほしいが、日本には、誰もがその存在を特定できるような「論文」の評価基準はなく、依然として「こうあるべき」だという規範意識により、個別に評価されている。

日本の大学で行われている初年次教育における論文指導で、背景の異なる指導者が公平で正確に学生の論文らしさを評価していくためには、文章の「らしさ」を見る観点を特定することが必要だが、それには、特定方法自体の可能性

を検討しながら進める必要がある。

2.2. 論文の文章構成を分析する観点

論述の文章には、内容自体を叙述するための表現と、内容を何らかの方向へと統括すべく、内容を脈々と紡ぐ働きをする表現がある。内容が並べられて何らかへと統括していく流れが文脈だとすると、文脈は、「話題」と、その表現のための「言語形式」、それらを合わせて読み取る「表現の立場」など、何層かのレベルの異なる層をもった構造になっていると言える。

佐久間・杉戸(1997:29)は、これを、①形態上の特徴、②表現内容上の特徴、③機能上の特徴と言う。土師(1990)によれば、論理的文章の様式は、主題、構成、叙述の3種の特性を、大きく叙述者側の表現と対象のための表現とに分けて整理でき、それらは(1)書き手、(2)読み手、(3)対象、(4)捉え方、(5)捉えられ方に対する期待、といった参加者とそれぞれの態度を表す表現でなりたっていると言う。土師(1990)は、論述構成を分析する際に構成を内容で追うと言いながら、その実、述語、中でも、動詞の意味や表す行為の内容に着目して構成を把握している。無意識にであっても、論述構成と言語形式の関係から分析した研究だと言えるだろう。

国語教育との関連で行われた60年代の多くの文章論の研究に加えて、80年代後半から会話を中心とした談話分析の研究が増えていき、その中で、日本語教育における学習目標のあり方を検討するものが増えた結果、文章、談話の分析の中では、連鎖性という概念に基づいて連文の形式から判断し、意見や話題の中心が連文配列のどの位置に存在するかでタイプを尾括型、開始型などと分類する流れができた(長田1984、佐久間1989など)。たとえば、佐久間(1989)は、要約文の構成類型を念頭に、1)原文の接続表現の利用、2)提題表現、3)主題の統括による構造類型に基づいて、原文と要約文との関係を分析したが、

6 その成果が、現在の日本語教育の実践に生かされており、また、それが、日本語教育の教材をベースにリライトされた初年次教育用教材へと展開している。

会話分析においても、基本的に、題の開始や終了を表すと考えられる多用な「言語形式」から分析目的に応じた指標を決めて単位が設定され、その単位の連

鎖形式や移行の流れを追って談話の全体構造が分析されている（笹川 2009, Maynard 1989, 三牧 1999）。

本稿でも、構成と表現の関係を見るためには基本的に従来の方針に従うが、「論文」という文脈の展開を言語形式と関連させるのが目的であるから、分類の指標には、連文の形式ではなく、構成と形式の関係を見た土師（1990）の方法を踏襲する。土師（1990）の述べる記述者の立場を示す行為動詞の中の叙述者側の立場で対象をとらえる方法が表現されている動詞を見つけ、それをを用いて章との対応関係を調べることにする。

3. リサーチデザイン

3.1. 研究目的と RQ

本研究の大きな目的は国文学の論文指導の観点や指導項目を明らかにすることであるが、そのためには、論述展開を担うと考えられる表現を特定し、次いで、論述文のタイプ別に論述展開表現の相違点を見ること、さらに、タイプ別の特徴を明らかにすることで、問題となる箇所がどのようなものかを知ることができると考える。

そこで、本稿では、まず、論述性の高い文章と、そうでもないと考えられる説明文タイプの文章の間で、異なる使用状況の語、すなわち、頻度に特徴的な差が見られる語を探し、論述を展開すると考えられる動詞を特定する。次いで、論述タイプの文章として、指標を特定するのに利用した学術論文と、学生が学期末の課題として書いたレポートとを比較し、両論述文の章内の指標動詞の使用数の出現状況を確認する。これにより、指標動詞が論述展開用語であるか、ならびに、学生レポートの論述展開状況を確認する。

つまり、論文とレポートとの相違点の詳細を見るために、章配列と語の関係を探り、何を指標として見るか検討した上で、再度、それらの動詞と文章構成との対応関係を分析していくというスパイラルな観察を行うのであるが、それは、これら分析のプロセス自体の検討も本稿の観察の対象であることによる。本稿での RQ は次の 2 つとする。

RQ 1：論文とレポートを比較するための論述展開の表現として動詞が利用できるか。

RQ 2：論述展開動詞と論文構成の対応関係が章の単位で観察できるか。

3.2. データ

目標となる国文学の論文のサンプルは、2012年度に、CiNiiでオープンアクセスが可能であったものとインターネット上に公開されていたものを集めた49編のうち、章立てがなされていた30編を利用する。国語学の論文は章立てがなされていないものも割にあるが、本稿では、章立ての位置で論述動詞を追うため、今回は、章立てがなされている論文を対象としている。

対する学生レポートは、国文学専攻の学生が、初年次の必修科目「文章表現」の指導を受けた年度末に学期末の評価課題として提出されたレポートを用いる。期末レポートの作成要領には、見本として回覧した国文学の論文を念頭において学習項目を意識して書くように指示した。期末レポートは、2013年度の30編と参照比較用に2012年度と同科目の期末レポート26編を用いる。

なお、今回利用させてもらった論文は、比較的最近発表された学術論文で、内容は、近現代の文学作品について考察するものである。本稿で分析する国文学の学生が期末レポートの題材としているものも近現代の文学を扱うものが中心であるが、中に、若干、古代（古事記）、中世（和泉式部日記）のものが含まれる。しかし、学術論文もレポートも、引用文はすべて削除し、地の文のみを調査の対象とするため、大きな差はないと考える。

また、2012年度の期末レポートと2013年度の期末レポートはその位置づけが異なっている。2013年度のレポートは、論文規範を形にしたループリックでの相互評価作業を授業活動に盛り込んだ結果を實力として問う評価がなされている。また、記述前には、目標論文の具体例を、一度、書写させて、論文形式の経験知を強制的に上げた上で、各自が期末レポートを作成するという流れで記述している。2012年度は、論文における約束事の意味と方法を指導した後、学生同士で各自の記述を評価し合うという協働学習作業を行った結果、論文に対する各自の理解が、期末レポートで表現できているかを問うものとして評価さ

れている。つまり、2012年度と2013年度の両レポートは、同内容の指導を受けた結果の実力判定用のものには違いないが、事前の取り組み方や授業活動に違いがあるために、その評価のあり方が異なっているのである。また、2012年度は、自由課題14編と指定課題12編を合わせた26編からなる。

論述文と比較する説明文は、BCCWJの教科書と新聞文章の文を利用する。文学や新聞など複数のレジスターの文体を品詞情報MVR (Modifier Verb Ratio) で比較した樺島・寿岳 (1964) によると、新聞、文学、教科書は異なる文体に位置づけられている。また、村田 (2007) でも、学術論文と新聞、文学は異なる接続表現を利用するというので、異なる文章に分類されている。品詞や接続詞に見られる使用語彙の差は、日本語の場合、統語構造の違いに関連することから、新聞や教科書にも意見や論説が含まれているが、その使用語彙は似て非なるものだと考えられる。

さらに、教科書データも新聞データも、それぞれ、サンプル数が412万語、1473万語と、BCCWJの中では比較的少ないデータであり、教科書は2005年から2007年度のもの、新聞は2001年から2005年のものと、最近のものであり、2012、2013年度を中心とした比較的新しい特定の小規模データとの比較における問題が複雑にならないと考えた。

以上から、論述文と説明文は述語の種類が異なると考えられることから、動詞に基づいて論文と比較する対象に新聞、教科書を利用する。

3.3. 分析手法

国文学論文 (以下、国論)、国文学科生の期末レポート2013年度版、2012年度版 (以下、2013生、2012年度のものは2012生とする) の形態素解析、ならびに、語彙リスト作成にはKH Coderを用いる。BCCWJの教科書と新聞の動詞は中納言を用いて検索し、出力される語彙リストを利用する。中納言の検索では「語義素」で動詞を検索した結果である。

論述文では、その文脈の展開を動詞述語文や接続詞等で担っていると考えられる。論文特有の構造、すなわち、<導入、根拠→意見、まとめ>といった文章構成を、直接、展開するのは述語で、「である」等の助動詞類を必要とする名

詞や形容詞の述語文は、叙述用のものが中心となると考えられることから、論述展開を担うものは少ないと考えられる。

また、文章の結束性を形成する表現もそれを補佐していると考えられるが、目的に合うかどうかを確認するために、語の頻度情報に基づいて、中尾（2012-2013）の観察に用いた接続詞、接続助辞、文末形式、指示詞を指標に検索したところ、4つの文章間で特徴的な差があるものが少なく、4つの文章ともに、よく似た接続詞、接続表現を利用していた。指示詞は以前の中尾（2012）の調査でも差が小さく、日本語の文章に高度のレベルで共通した利用状況の語と考えられ得るが、接続詞、接続助辞等も似ているものが多かった。しかし、検索した指標のうち、動詞（文末形式）には頻度差があるように見受けられた。

そもそも論文は、文章の構造上、序論、本論、結論と三部にするという約束事が存在し、さらに、本論には、事実と意見を分けてその取り扱い方を説明する文章を入れることで、その構成を繰り返し積み重ねていくような下位構造を持つ。これらの積み重ねが全体の構造の形成につながる文章では、その構成を明示する行為動詞が繰り返されるのが当然で、そのような構造を持たない新聞や意見文や論説文は、同じ動詞を高頻度に使うことはないはずである。したがって、当然、動詞の種類に差があるのはジャンル差によるものだと考えられるが、どのような動詞が論述文に高頻度で出現するかがわからないため、繰り返し同じ動詞を利用しないはずの説明文と比較して使用頻度の差、すなわち、ジャンル差の見られるものを「論述動詞」として特定するために、新聞、教科書を利用することにした。

以上から、本稿の最初の比較分析では、動詞述語文、すなわち、文末の動詞を指標とする。

次いで、国論と学生レポートの両者の文章を「論述表現」の分布で比較するが、この構成と表現の関係を調べるには、メイナード（2004）を踏襲した萩原（2009）とFATHMAN・KOBAYASHI（1984）の談話分析の手法を用いる。すなわち、特定の表現にコードを付与していき、論文内のどの章にそのコードが付与された動詞がどの程度出現するかという章毎の分布を観察するというものである。コード化、分布観察には、日本語の語彙リスト作成に引き続き、KH

Coderを利用する。最後、これら分析のプロセスを振り返り、分析と結果について考察する。

4. 結果と考察

4.1. RQ1 論文とレポートを比較するための論述展開の表現として動詞が利用できるか

4種の文章に共通する高頻度動詞を紙面の都合で28語までを100万語あたりの調整頻度に変えて一覧にしてみる(表1)。

文章間の頻度の多寡を比較する前に、まずは、各文章内で、高頻度かどうかだけに着目して高頻度動詞(表1)をその性質で外観する。高頻度動詞の性質判断には、国立国語研究所『分類語彙表』の「用」の分類を利用する。

国論の高頻度動詞には、『分類語彙表』「用の類」の中の「2.3 精神及び行為」の下位カテゴリーである「2.30 心」類の動詞が多い(表1内の太字)。やや入れ替わりがあるが、2013生でも、国論で高頻度の「2.30 心」の動詞「考える」「思う」「見る」「知る」の頻度が高い。教科書での高頻度語は、さらに入れ替わりがあるが、「見る」や「考える」は高頻度である。新聞では、論文類とは異なった語の頻度が高くなっている。

国論の動詞の高頻度語1位から4位の「2.30 心」に続く高頻度語は、同じく『分類語彙表』「2.3 精神及び行為」の下位の「2.31 言語」類の動詞「言う」「述べる」である。「2.31 言語」類の動詞は、どの文章にも、4~5語しかないが、少ないながらも一定数が、各文章において高頻度に使用されている(表1内の下線部)。この「2.31 言語」類の動詞は、国論と2013生の高頻度語は類似しているが、教科書、新聞とは似ていない。

以上の差を視覚的に図示するため、先の頻度表を用い、College Analysisでコレスポネンシ分析を行ったところ、3次元抽出され、第2次元までで累積寄与率87.13%であった。図1は第1アイテムのスコアの散布図である。頻度表1の高頻度語を見ている限りでは、論文類⇔教科書⇔新聞の3グループに、対応する類似性が視える語もあったが、散布図で見ると、3グループに分かれてお

り、それぞれの文章の特徴として見るべき動詞の性質には異なりがある。

表1：論文、レポート、教科書、新聞の高頻度動詞28語

— () 内の数字は各データの動詞総数—

国論 (33671)		2013生 (3679)		教科書 (BCCWJ) (2431)		新聞 (BCCWJ) (4198)	
動詞	PMW	動詞	PMW	動詞	PMW	動詞	PMW
1 見る	40005	使う	44577	為る(する)	116002	居る	6670
2 考える	31333	考える	35608	見る	84327	聞く	5002
3 示す	24442	思う	24735	調べる	53065	狙う	4288
4 表す	23344	見る	23920	考える	23447	為る	3335
5 言う	22779	言う	22832	作る	22624	目指す	2620
6 述べる	21086	持つ	18483	書く	11929	言う	2382
7 持つ	21057	知る	17124	因る	11518	写す	2382
8 思う	16750	受ける	14406	付ける	11107	探る	2382
9 用いる	11969	出る	13862	纏める	10284	学ぶ	2144
10 知る	11553	行う	12503	成る	9872	語る	2144
11 捉える	11434	調べる	12503	聞く	9461	考える	2144
12 使う	11078	飼う	11688	出来る	8638	有る	2144
13 書く	10900	感じる	11144	居る	8227	制する	1906
14 異なる	9593	書く	11144	有る	7816	続く	1906
15 行う	9444	述べる	10329	話し合う	7816	求める	1667
16 得る	9118	表す	9242	確かめる	7816	始まる	1667
17 語る	9029	作る	8698	話し合う	7816	次ぐ	1667
18 含む	8138	殺す	7883	読む	7816	示す	1667
19 描く	8019	生きる	7883	探す	7404	守る	1667
20 認める	7573	読む	7883	行く	6582	読む	1667
21 呼ぶ	7187	違う	7339	立てる	6170	開く	1429
22 与える	6950	入る	7339	決める	4936	広がる	1429
23 出る	6801	分かる	7067	振り返る	4525	訴える	1429
24 見える	6771	異なる	6252	歌う	4525	防ぐ	1429
25 生じる	6326	死ぬ	5980	使う	4114	来る	1429
26 受ける	6296	愛す	5708	飛び出す	4114	越す	1191
27 感じる	6267	続く	5708	知る	3702	掛ける	1191
28 読む	6148	変わる	5708	言う	3702	響く	1191

表2：国論、2013生、教科書、新聞の上位28語の対応分析結果

固有値	0.2809	0.098	0.056
相関係数	0.53	0.3131	0.2366
寄与率	0.6458	0.2254	0.1287
累積寄与率	0.6458	0.8713	1

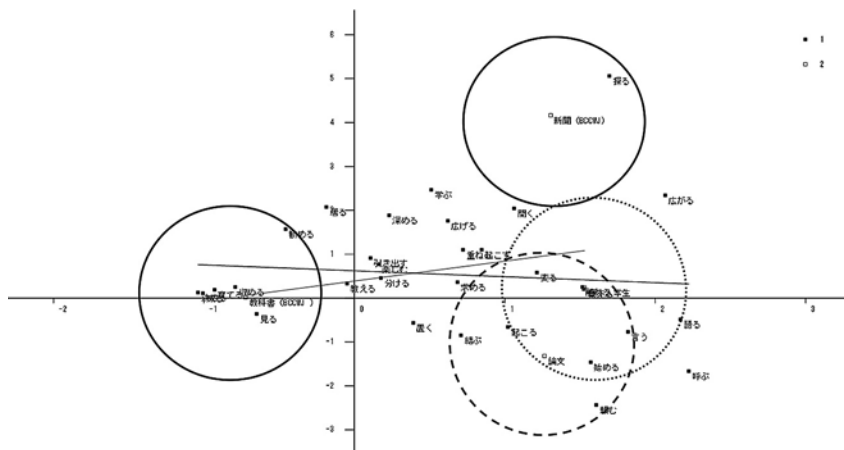


図1：国論、2013生、教科書、新聞動詞の対応分析結果散布図（第1アイテムスコア）

国論、2013生を論文類として1つと捉え、再度、高頻度動詞を見ると、論文類には認知、思考を表す「2.30心」の動詞と、「言う」「述べる」「書く」といった表現結果を報告するような「2.31言語」の動詞の使用頻度が高い。しかし、これらの動詞は、4つの文章の対応を見たコレスポネンス分析の結果では、論文類の特徴を表す語ではないようである。

頻度に極端な差があるものもあり、検定には注意が必要なものもあるが、上位の動詞28語の上位3分の1の7語を、各グループをペアにして、石川他（2010）付録の仮説検定ファイルで χ^2 検定したところ、「見る」は一貫して教科書での使用が多く、「言う」「語る」は論文系での使用が多い。

表3：4文章ペアの χ^2 統計値

	国論-教科書		国論-新聞		2013生-教科書		教科書-新聞		国論-2013生	
	χ^2 値	p値	χ^2 値	p値	χ^2 値	p値	χ^2 値	p値	χ^2 値	p値
見る	107.19	0.0000	164.33	0.0000	115.68	0.0000	347.75	0.0000	22.79	0.0000
言う	38.33	0.0000	76.26	0.0000	34.47	0.0000	0.53	0.4651	0.0000	1
語る	19.08	0.0000	20.75	0.0000	3.15	0.0761	2.03	0.1547	15.1	0.0001
求める	0.86	0.3551	6.06	0.0138	0.5	0.481	0.58	0.4483	0.0000	1
学ぶ	0.51	0.4741	3.87	0.049	0.0000	1	0.02	0.8776	2.04	0.1529
探る	0.0000	1	12.9	0.0003	0.99	0.3207	2.52	0.1126	3.74	0.053
決める	52.61	0.0000	0.09	0.7664	8.54	0.0035	15.04	0.0001	0.23	0.6284

以上の観察からすると、論文類に特徴的に表れる論述展開の文脈を追うのには、「言う」「述べる」「語る」を見るのがよさそうである。

教科書を説明文の一種と考え、論文類と対照的に位置づけた結果、論文類でも高頻度の「見る」が、教科書に特徴的な動詞であると判明した。ただし、小学校教科書の構造化を行った中尾（2001）の調査では、教科書には、主題の説明の文章の前後に、学習上の指示を意図して出す文章が挿入されており、それらの文章が、一様に、「見る」「てみる」「たい」「だろう」「ましょう」「と思う」などの文末形式であると指摘している。このことは、小学校教科書の調査が、認知行為「見る」動詞がその対象を指示する意図も含意することを示している。

BCCWJの教科書コーパスは小学校教科書を収録したものではないが、BCCWJの教科書コーパスで「見る」が特徴的な動詞であることは、教科書という文脈の構成と関連があると考えられる。

そして、「見る」が、認知行為とその行為が指示する対象への注意喚起の現れを含意する動詞だとすると、論理的な考察を示唆する働きがあると考えられそうである。そうすると、論述文の展開にも関連するものだとも考えられることから、「見る」も、論述展開を観察するための指標の1つに加えてよいように思える。

- 14 以上の対照観察と、比較結果の考察のもと、論文類に特徴的に表れる論述展開の文脈を追うためには、国論に多用されていた動詞のうち、「2.30心」と「2.31言語」の動詞16語（見る、考える、示す、表す、言う、述べる、思う、知る、捉える、書く、語る、描く、認める、見える、感じる、読む）を用いることが

できるだろう。また、16語の動詞のうち、「2.30心」コードを「見る」「知る」「感じる」「見える」「認める」「考える」「思う」「聞く」「把握する」「分かる」「捉える（とらえる、捕らえる）」に付与し、「2.31言語」コードを「読む」「言う」「述べる」「示す」「表す」「書く」「描く」「語る」に付与することで、これらの動詞の出現数をコード数に変えて、章節構造と対応させて見るときの指標とすることができると思う。

4.2. RQ2 論述展開動詞と論文構成の対応関係が章の単位で観察できるか

4.1 (RQ1) の観察と考察により、指標とした動詞は「2.30心」と「2.31言語」の2種類からなる。「2.30心」は思考や認知、解釈の行為を表す動詞が中心となり、「2.31言語」は記述、報告行為を表す動詞が中心である。「2.30心」と「2.31言語」は、それぞれ、土師（1990）の言う「解釈」を述べる文章用の表現と、「説明」する文章用の表現と考えられる。論述の文章では、記述する事実に対する説明と解釈を付与することで論述が展開される（土師、1990）。

したがって、この2種の動詞の現れる章、ならびに、章毎の頻度、その使用状況を、論述の文章、すなわち、国論、2013生、2013生の文章の中で観察することにより、論述展開動詞が構成とどのように関連しているかを把握することができるだろう。また、章の流れの中のどの辺りにそれぞれが分布するかについても把握できると期待できる。

4.2.1. 国文学論文における解釈用表現と説明用表現の分布

本稿で用いた国文学の論文30編のうち、章立て数数が最少の論文は3章立てで、最大は8章立てであった。平均すると1本あたり5章立てとなるが、中央値は4章で、次いで、6章立ての論文も多い。図2に章立て数別に論文数を整理する。

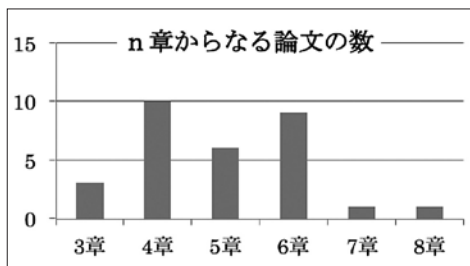


図2：内包する章立て数別に見た国論の数

国文学の論文の章立ては、概ね、下位に節を設けない章立てを取るものが多い。国論データでも、節を複数下位層に保有する構成を立てるものは、30編中4本である。下位に節を持つ論文は、6章立て、ないし、5章立てで、4章以下や7章以上の論文に下位の節を持つものはなかった。

それら、4章立てから6章立てで構成される論文での「2.30心」(考察の動詞)、「2.31 言語」(記述説明の動詞)の使用数(出現数)の分布を見るために、各論文の章立てを横軸に折れ線グラフに整理した。各論文の各章で利用される文の数はそれぞれ異なり、また、出現数の増減変化を観察することが目的であること、また、調整頻度や割合に変えても頻度による図示である以上、グラフの形状が大きく変わることはないため、グラフの縦軸を揃えない。巻末に資料として添付しておく。

図3a-cは典型例である。これらの図の分布のように、国論の各章の分布は、論文の中程の章に至るまでに徐々に使用数が多くなり、最終章にいくに従って少数になっていくという出現分布をとるものが多い。なお、このような出現分布の論文を、ここでは便宜上、「心」タイプの動詞が「中高型」に出現していると表現しておく。

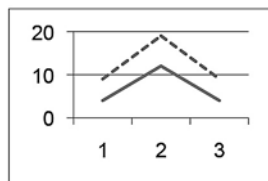


図3a：3章立て論文
(中高型)

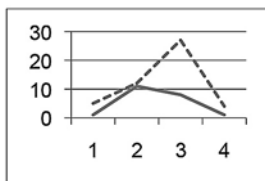


図3b：4章立て論文
(中高型)

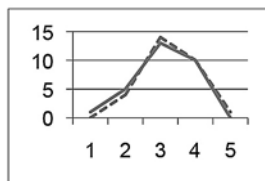


図3c：5章立て論文
(中高型)

分布は、図3a-bのように中央付近の章に進むしたがって高くなり、また徐々に頻度が低くなるという1山の中高型ばかりではない。「2.30心」が多く利用される章、少数、または、全く使用されていない章とが交互に出現する「高低交互型」もある。そして、「2.31 言語」の動詞と、使用頻度に差はあるが、同様の割合で使用数が分布する「心言同率型」のもの、「2.30心」と、「2.31 言語」が相補的に出現する「心言相補型」のものもある。さらに、両者ともが、最終章

で高くなったまま終わるパターンで出現している「高終わり型」のものもある。なお、国論では、7章立て、8章立ての2論文のみ、1章目の出現数が2章目よりも高い「高始まり型」であった。これは、章立ての多いこの2論文の場合には、最初の章が論文全体の考察を要約したものとなっていることによると考えられる。

この高始まり型の2つを例外として除くと、ほぼ、全ての論文で、始まりの章は「2.30心」、「2.31言語」の動詞、すなわち、考察、記述説明の使用頻度が低く、中央付近の章に進むにつれて考察、記述説明の動詞が多く使用される章が出てくる。増減しながら進む論文もあり、また、グラフで視覚的に比較したのみではあるが、論文の場合、中程のどこかの章に、必ず1山以上、「2.30心」と「2.31言語」が使用される章があるという出現分布をとっている。

4.2.2. 2013年度生期末レポートにおける解釈用表現と説明用表現の分布

2013生30編は、最少章立て数が3章で、最大章立て数は7章である。平均すると1本あたり5章立てで、中央値も5章であった。図4に章立て数別レポート数を整理する。

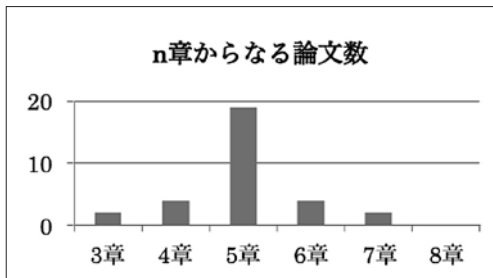


図4：内包する章立て数別に見た2013生数

2013生のレポートに見られる章立てでは、節を複数下位

層に保有する構成を立てるものが割と見られた。数えると、30編中11本ある。下位に節を持つものは、3章以上の全ての章立てに1つ以上あり、国論よりも細かく分けられていると言える。

2013生の「2.30心」（考察の動詞）、「2.31言語」（記述説明の動詞）の使用数（出現数）の分布を見ると、国論では標準的な「中高型」のものが6つ、中高型ではあるが、「2.30心」（考察の動詞）、「2.31言語」（記述説明の動詞）のどちらかの使用頻度が少ないものが6つあり、それ以外の18編は、中高型とは言えず、変則的で、共通したパターンが見られないものであった（巻末一覧表から）。

「2.30心」、「2.31 言語」の動詞がまんべんなく利用されてはならず、章により、使用するかしないかの違いがあるものや、考察の動詞は使用しているが、記述説明の動詞を使用されていないものが見られた。国論では、中程のどこかの章に、必ず一山以上の使用が見られたことと比べると、思考や記述説明の出現分布にはむらがあると言える。

4.2.3. 2012年度生期末レポートにおける解釈用表現と説明用表現の分布

2012生26編は、最少章立て数が1章で、最大章立て数は6章である。平均すると1本あたり4章立てで、中央値も5章であった。図5に章立て数別レポート数を整理する。

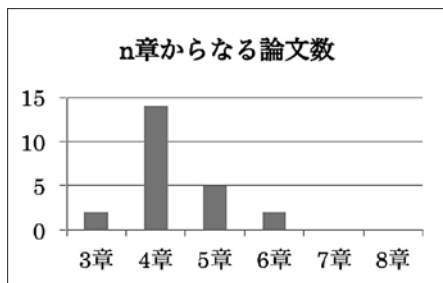


図5：内包する章立て数別に見た2012生数

2012生のレポートに見られる章立てでは、節を複数下位層に保有する構成を立てるものは2編のみで、下位に節を持つのは4章立てと5章立てであった。

2013生の「2.30心」（考察の動詞）、「2.31 言語」（記述説明の動詞）の使用数（出現数）の分布を見ると、国論では標準的であった「中高型」のものが2つ、中高型ではあるが、完全に中高ではなく、途中増減のある分布のものが3つあり、それ以外の11編は、割に、最初の章か終わりの章に記述説明の文が多いものや、その増減の移り変わりの甚だしいものが見られるという共通性があるものの、変則的で、パターンを見いだすのは難しい（巻末一覧表参照）。

2013生の結果同様、「2.30心」、「2.31 言語」の動詞が国論様に、中程に、まんべんなく利用されているわけでもなく、考察と記述説明が相補的なわけでもない。2012生のレポートでは、思考や記述説明の両動詞の出現分布に関連性がないように見える。つまり、論述展開とは関連せず使用しているということではないか。

以上、4.2では、コードの出現数と章とを対応させたが、これにより、国論

にはパターンが見られ、2013生、2012生にはパターンが崩れていると見られた。以上の結果から、論述動詞と論文構成の対応関係が章の単位で観察できた。論述動詞を用いて、論文構成と動詞との対応関係が章の単位で観察できたことから、特定の述語動詞は論述構成を形成する指標とすることができると言えるだろう。

4.3. 分析プロセスと分析結果について

章立て構造を担う文章中の表現として何に着目するべきかについては、国文学論文、学生の期末レポート（2013生）、BCCWJの教科書と新聞コーパスの動詞の使用頻度を比較、ならびに、その結果の考察から特定した。すなわち、論述の文章構造を展開していく「論述動詞」（見る、考える、示す、表す、言う、述べる、思う、知る、捉える、書く、語る、描く、認める、見える、感じる、読む）である。16語の動詞は、それぞれ、『分類語彙表』の「用」の類の「230心」と「231言語」の行為に分類されるものであった。

抽象化のため、コード化するにあたっては、「230心」コードを、「見る」「知る」「感じる」「見える」「認める」「考える」「思う」「聞く」「把握する」「分かる」「捉える（とらえる、捕らえる）」に付与し、「231言語」コードを読む」「言う」「述べる」「示す」「表す」「書く」「描く」「語る」に付与した。

「論述動詞」16語を「230心」と「231言語」の2グループに集約するコードによって2つのうちのどちらの語が章内に出現したか、ならびに、1論文中の出現数の分布を観察した。結果、国文学論文の出現数には始まりと終わりの部分での使用頻度が少なく、中頃の章に至までは徐々に増え、中頃の章をすぎると少なくなるという共通の「中高型」のパターンが確認できた。

また、学生の期末レポートでも同様に出現数とその分布を調べたところ、過不足はあるが、「230心」と「231言語」の動詞のどちらかが、必ず、利用されていた。ただし、論述動詞の使用は確認できたものの、出現パターンにはむらがあり、共通したパターンが崩れているものが多く、論述構成が不完全なものであることを示唆する結果が得られた。

以上、RQ1、2の解は得られたが、本稿の比較と対応関係の観察は、高頻度

語をもとに、論述展開の動詞を特定したことと、それを指標に章立てとそれら指標動詞との対応が、国論に確認できたことのみである。ただし、論述文における特徴語として「論述動詞」を特定したこと、ならびに、動詞に着目したことで章内の論述展開が数の上でパターン化でき、さらに、推測できることが明らかになった点は興味深い。

なぜなら、土師（1990）が分析していた論述構成を明示的に示す機能が、動詞という語句単位にも見られること、また、これらを指標にすることで、ある程度の論述構成を確認できることを示したことになるからである。また、本稿で着目した動詞に、論述構成を担う語としての機能が確認できたと言えるからである。

そして、これは、論文とレポートの構成を、その論述動詞とした語の頻度と章立てとを対応させて比較するという簡単な方法で、論文の体裁がまねただけか、論述展開がなされたか判断する方法を示したことでもある。そう考えれば、文章表現上の指導項目の一つを「論述動詞」とし、さらに、論述構造を視覚的に確認する方法を示すことができたとも言える。「論述動詞」の出現数を章立てにそって比較する方法で、学生のレポートの論述性の曖昧性が視覚的に確認でき、指導項目を具体化する可能性が考えられるのである。

5. まとめ

本稿では、論述の文章の構造を担う表現として動詞述語文から16種の動詞を特定し、それを指標に、論文の章立て構成との関連を調べた。指標として用いた論述表現は、『分類語彙表』の「2.30心」と「2.31言語」の動詞16語であったが、これらの動詞の出現数を章の配列と関連させて、出現数の分布を観察したところ、国文学論文の出現数には共通するパターンが確認できた。また、学生
20の期末レポートには、論述表現が使用されているかどうかの存在は確認できたものの、出現パターンにはむらがあり、論述構成が不完全なものではないかということを示唆する結果が得られた。このことから、一定の結果が得られたと考え、今回の分析プロセスの妥当性が確認できたと考える。

ただし、論述表現としては、本稿では動詞を扱ったのみである。また、段落内のどこに、出現するか、章節内のどこに出現するかという具体的な出現位置は比較できていない。

さらに、国文学論文には、使用上のパターンが章立て内にありそうだと判断できたが、学術論文の中にもかなり不確かなパターンの論文が見られたことから、この分析指標が他にも応用できるかを見てこの分析プロセスの妥当性を判断した方がいいだろう。そのためには、国文学の論文だけではなく、理系など、他分野での論文にも応用すべきである。その上で、また、観察、分析の方法、これらの問題を考える必要がある。

さらに詳細な分析方法を検討していく必要はあるが、今回の調査結果からは、初年次教育での論文指導における指導項目の整理の可能性が検討できそうである。次の課題としたい。

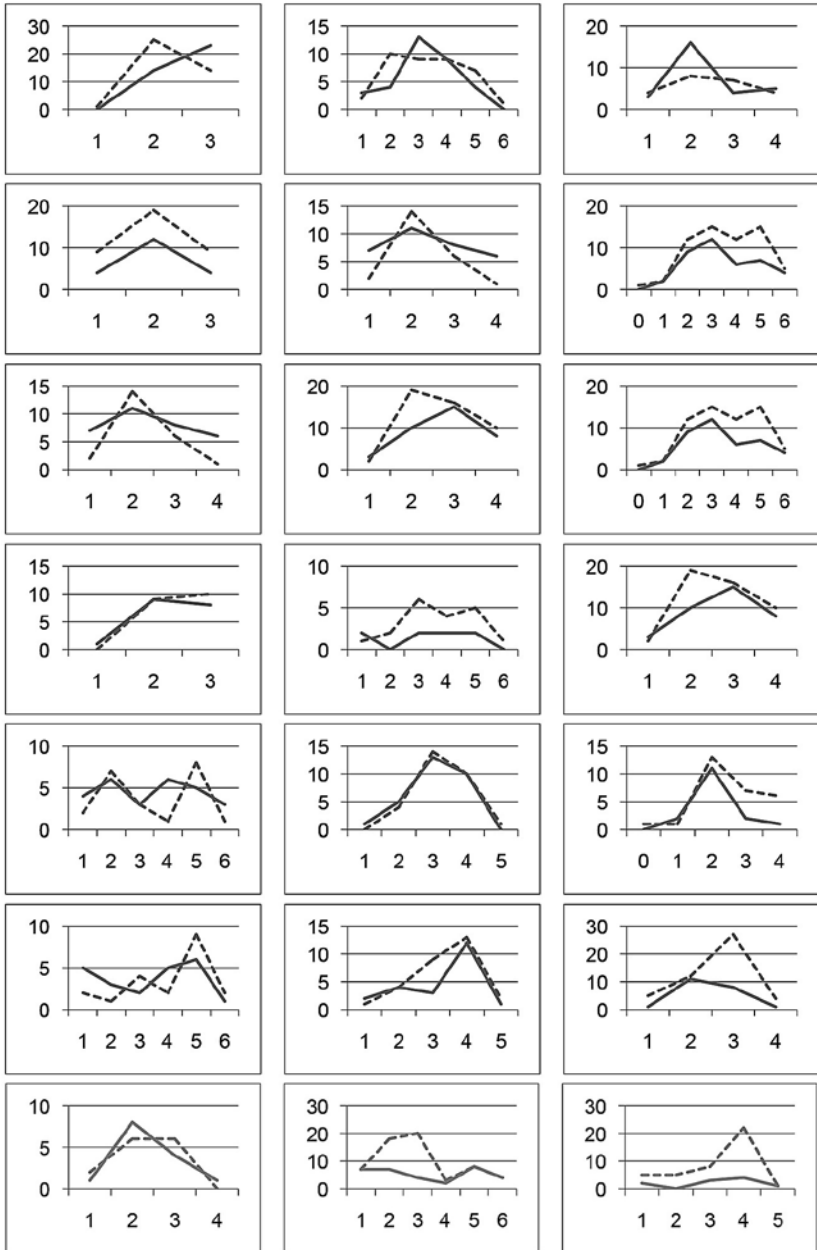
(※) 本研究は、統計数理研究所共同研究リポート「論文構成と述語動詞の章内出現数の関連—国文学論文と国文学科生期末レポートにおける論述動詞の出現位置から—」の一部を加筆修正したものである。そして、平成24年度～平成26年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）の基盤研究（C）課題番号：24520598、研究課題名：「ピア・レスポンスの何が文章の質的向上と評価結果に影響するのか」の助成を受けた研究成果の一部である。

参考文献

- ANN FATHMAN HIROE KOBAYASHI (1984) Rhetorical patterns in English and Japanese TESOL Quarterly Volume 18, Issue 4, pages 737-738, December 1984.
- 石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠 (2010)『言語研究のための統計入門』（三省堂）。
- 石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥予・中村紗弥子 (2009.12)「接続詞の機能領域について」『言語文化』46: 79-94（一橋大学）。
- 市川孝 (1978)『国語教育のための文章論概説』（教育出版）。
- 荻原稚佳子 (2009.2)「意見述べにおける日本人の論理展開についての一考察」『明海日本語』14。（明海大学）
- College Analysis Ver. 5.0: <<http://www.heisei-u.ac.jp/ba/fukui/analysis.html>>
- 樺島忠夫・寿岳章子 (1965)『文体の科学』綜芸舎。
- 樺島忠夫 (1983)「文章構造」『講座日本語と日本語教育5 運用 I』118-157（明治書院）。

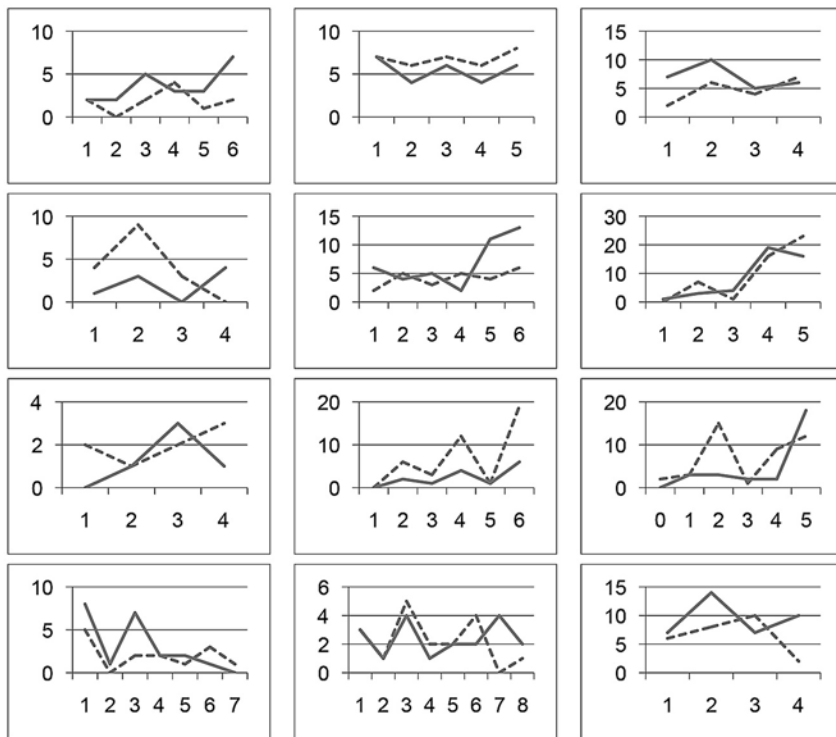
- 亀井孝・千野栄一・河野六郎 (1995) 『言語学大辞典6 術語編』 (大修館書店).
- 国立国語研究所 (1964) 『分類語彙表―増補改訂版』 国立国語研究所資料集 14 (大日本図書株式会社).
- KH Coder : <http://khc.sourceforge.net/>
- 佐久間まゆみ (1989) 『文章構造と要約文の諸相 (日本語研究叢書 (4))』 (くろしお出版).
- 笹川洋子 (2009) 「日本人女性の会話に見られる話題轉換の構造について」 神戸親和女子
大學大学院研究紀要 5, 15-24.
- CiNii:<<http://ci.nii.ac.jp/>>
- 中納言 : 国立国語研究所 <<http://ninjal.or.jp/>>
- 中尾桂子・森下淳也 (2001) 「年少者中級日本語教育における読解指導用シラバス検討の
ための小学校教科書の文章構成の応用方法」 神戸大学国際文化学会 『国際文化学』
4, 133-151.
- 中尾桂子 (2012) 「国語・国文学論文におけるアカデミック性判断の指標」 『大妻国文』 44,
1-25, 212.
- 中尾桂子 (2013) 「文系短大生の学期末レポートの論文らしさ」 『大妻国文』 44, 1-25.
- 長田久男 (1984) 『国語連文論』 (和泉書院).
- 永野賢 (1986) 『文章論創設 : 文化論的考察』 (朝倉書店).
- 土師弘 (1990) 「評論・論説の表現」 『表現体系各論篇第二七卷 評論・論説の表現』 (冬至
書房).
- 樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析』 (ナカニシヤ出版).
- BCCWJ: 国立国語研究所 <<http://ninjal.or.jp/>>
- 三牧陽子 (1999) 「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー大学生会話の分
析」 『日本語教育』 103号 (日本語教育学会) 49-58
- 水谷静夫 (1983) 『講座日本語と日本語教育5 運用 I』 (明治書院).
- 村田年 (2007) 「専門日本語教育における論述指導のための接続語句・助詞相当語句の研
究」 統計数理研究所特集第66巻第2号, 269-284.
- 泉子・K. メイナード (2004) 『談話言語学 ―― 日本語のディスコースを創造する構成・レ
トリック・ストラテジーの研究』 (くろしお出版).
- Senko K. Maynard (1989), Japanese Conversation: Self-contextualization through
Structure and Interactional Management Class Notes, 3-23.

資料 国文学論文内の「2.30心」(考察の動詞)、「2.31言語」(記述説明の動詞)の分布1



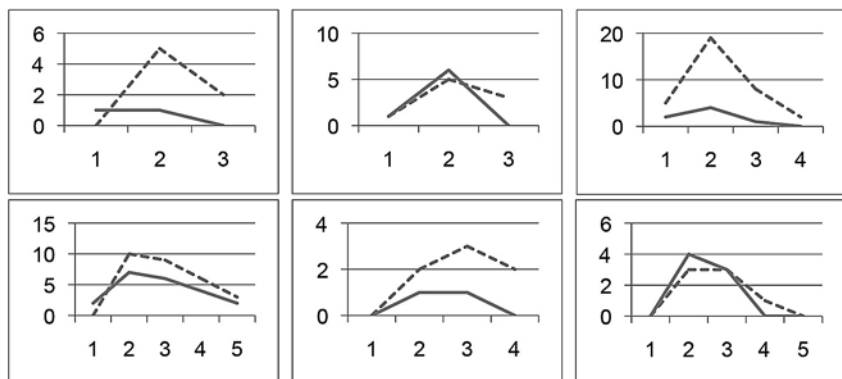
ピア・レスポンス導入後の期末レポートにみられる論述構成上の課題

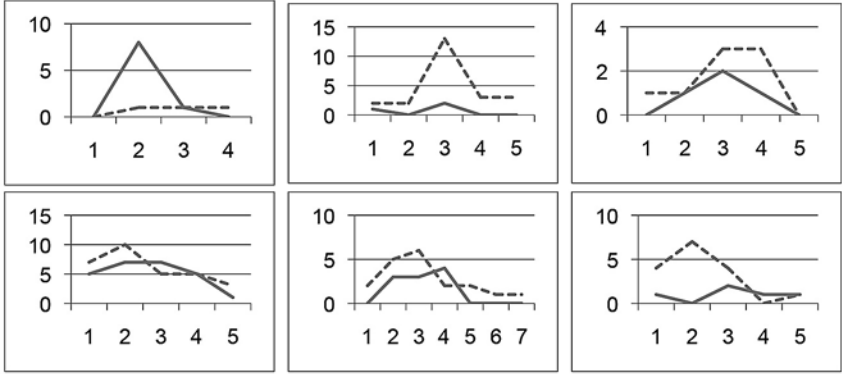
国文学論文内の「2.30 心」(考察の動詞)、「2.31 言語」(記述説明の動詞)の分布 2
 「高終わり」「高始まり」など



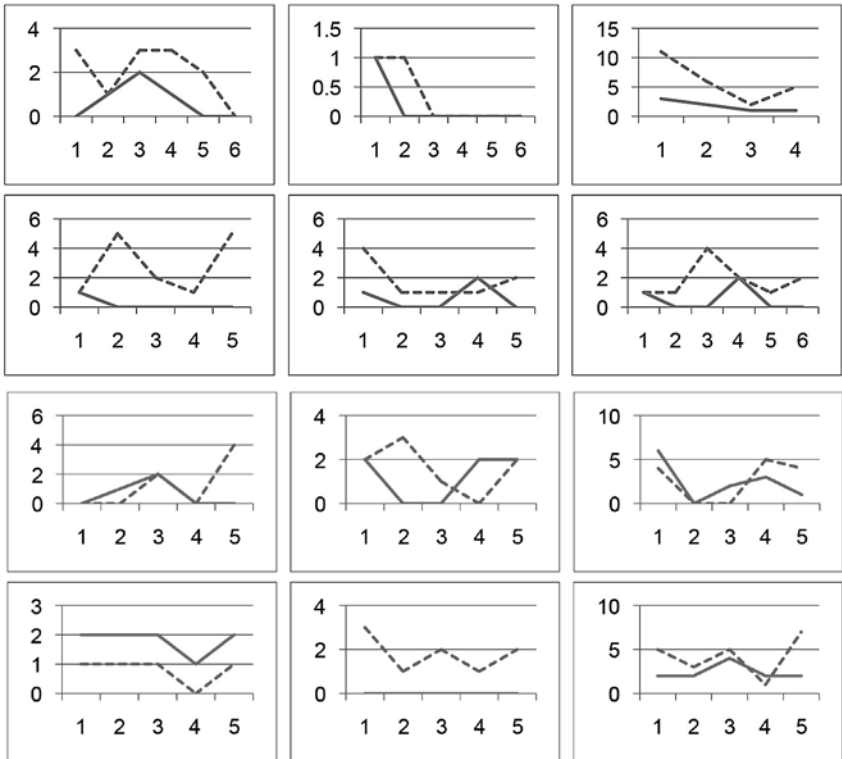
2013年度学生期末レポート内の「2.30 心」(考察の動詞)、「2.31 言語」(記述説明の動詞)の分布

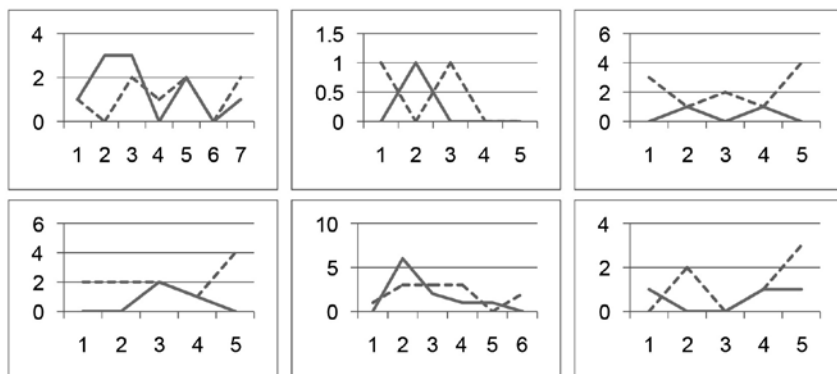
中高型





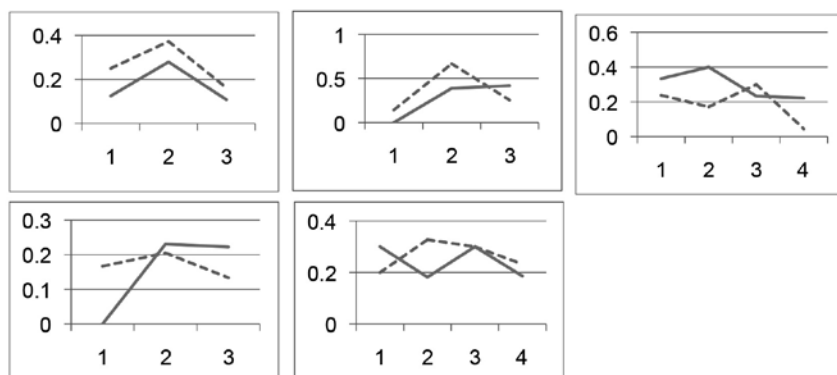
2013年度学生期末レポート内の「2.30心」（考察の動詞）、「2.31言語」（記述説明の動詞）の分布
中高型以外



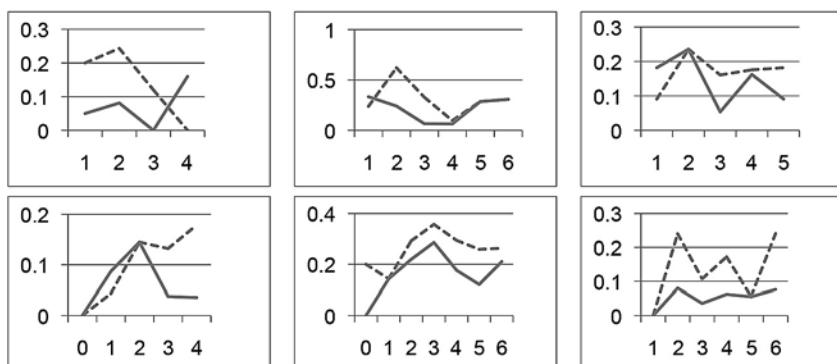


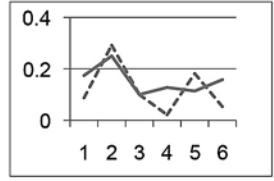
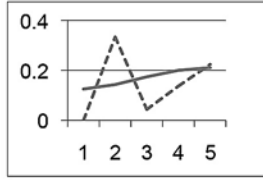
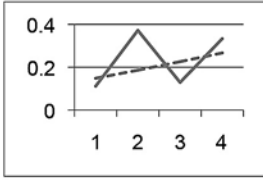
2012年度学生期末レポート内の「2.30心」(考察の動詞), 「2.31言語」(記述説明の動詞)の分布

中高型



低始まり高終わり型





高始まり型

